

1131 大腸癌の骨シンチ107例の検討

上野恭一(石川県立中央 放)、松田博人、島崎英樹(同内)、山田哲司、北川 晋、中川正昭(同 外)

大腸癌では、骨転移は比較的稀とされているが、本症での骨シンチのまとまった報告は少ない。そこで我々は1987年7月から95年3月までに施行した107例(133回)を対象にその有用性、骨スキャン所見等について検討した。(年齢 33-99歳)。骨スキャンは、Tc-99m MDP 555-720MBqと東芝GCA901Aを使用した。

骨転移13例、骨転移疑い3、骨折(圧迫、肋骨など)8、関節炎4、水腎症4、肝転移1などが見られた。症例を選んで、検査依頼されていることを考えると、骨転移の頻度は多くはないが、頑固な疼痛がある場合に骨転移との鑑別に有用であった。また、大腸癌による水腎症や肝転移が描画されることがあり、診断に注意を要する。なお、malignant ascitesへの集積や、super scanは見られなかった。

1132 腫瘍マーカー陰性前立腺癌例における骨シンチグラフィの有用性について

相澤 卓、栃本真人、伊藤貴章、並木一典、銚石文彦、三木 誠(東京医大泌) 鈴木孝成(東京医大放)

過去10年間に経験した前立腺癌患者285例のうち18例に腫瘍マーカーが正常範囲内の前立腺癌症例を経験した。うち、3例は治療に反応せず、急速に骨転移が進行した。

年齢 主 訴 病期 経 過

症例1: 73歳 排尿困難 B 5年7カ月で癌死

症例2: 45歳 排尿困難 D2 11カ月で癌死

症例3: 57歳 尿 潜 血 D2 6カ月で癌死

前立腺癌の経過観察にはPSAやPAP等の特異的な腫瘍マーカーがあり、経過観察には骨シンチグラフィを必ずしも頻回に行う必要はないと考えられている。しかし、はじめから腫瘍マーカー陰性例に対しては、理学症状等を考慮しながら骨シンチグラフィを施行する必要がある。